〈論　文〉

多文化共生社会で地域と世界をつなぐ絵本の可能性
―「絵本のまち板橋」の活動とIBBY世界大会からの考察―

杉　原　麻　美

要　約

新型コロナウィルスの感染拡大、ロシアによるウクライナ侵攻など、2020年以降、世界は重大な共通課題に直面した。世界各地での異常気象による被害、BLM運動に象徴される差別問題なども繰り返し報じられ、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指すSDGsの推進と人々の意識変容が急がれる。このような時勢を受けて、絵本に代表される「物語の力」が果たす社会的役割にも期待が寄せられている。一方、淑徳大学人文学部のキャンパスがある東京都板橋区は、2021年３月に「いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン2025」を発表し、この重点目標のひとつに「絵本のまち板橋」のブランド化を掲げた。板橋区立美術館が1981年にボローニャ国際絵本原画展を開催したことをきっかけに、イタリアのボローニャ市と板橋区の交流が深まり、板橋区はボローニャ市から寄贈された本を中心に世界約100か国、３万冊以上の絵本を所有する。2021年３月に移設オープンした板橋区立中央図書館には「いたばしボローニャ絵本館」が併設され、区の重要な文化施設となっている。板橋区はこの文化資産と区の特色である印刷・製本業を連携させ、絵本文化を通じた創造都市の実現を標榜している。2022年５月には板橋区は内閣府の「SDGs未来都市」に選出された。

本稿では、この「絵本のまち板橋」の推進事業として2021年度から始まった取り組みや、2022年９月にマレーシアで開催されたIBBY（国際児童図書評議会）世界大会と周辺の視察をもとに、ローカルとグローバルの両面から、絵本の今日的な役割と絵本IPをめぐる動向について論考する。

キーワード

絵本　板橋区　ボローニャ　SDGs　多文化共生

１．研究の背景

１．１　「絵本のまち板橋」とこれまでの取り組み

淑徳大学人文学部のある板橋区は、2021年３月に「いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン2025」（2021年度～2025年度）[1)]を発表した。この中の「重点目標① 板橋の特色ある文化芸術×魅力の創造・発信」には、以下の３つの柱が示された。

すぎはら　まみ：淑徳大学　人文学部　准教授

１　**「絵本のまち」のブランド化**：区の施策に幅広く絵本の要素を取り入れ、絵本作家などのクリエイター育成、区の特色である印刷業を活用した絵本製作事業などに取り組み、絵本という文化芸術が生み出す需要・供給・消費を通じ創造都市の実現につなげる。

２　**国内外から注目される文化芸術**：2019年にリニューアルし展示環境が充実した板橋区立美術館での歴史的価値ある展示企画の推進、国際交流事業の一つとなっているイタリア・ボローニャ国際絵本原画展や国際的なアーティストとの連携によって、国内外に誇れる魅力を創造・発信する。

３　**都市交流を活かした板橋の文化の振興・魅力発信**：海外姉妹友好都市などとの交流、板橋の伝統工芸や郷土芸能などの発信。

板橋区はイタリアのエミリア・ロマーニャ州の州都・ボローニャ市との間で2005年に友好都市交流協定を締結している。板橋区とボローニャ市との交流は、1981年に板橋区立美術館が世界最大の児童書専門のブックフェア「ボローニャ・チルドレンズ・ブックフェア」と連携した「ボローニャ国際絵本原画展」を開催し、日本の巡回展の幹事館になったことから始まった。[2)] ボローニャ国際絵本原画展は新人絵本作家の登竜門として知られ、入選作家はその芸術性が世界的に評価されたとして注目を集める。こうした世界から優れた作品と絵本が集まるボローニャから、板橋区には毎年絵本が寄贈されている。

先のビジョンが発表された2021年３月には、板橋区立中央図書館があらたに板橋区平和公園（常盤台４丁目）の敷地内に移転・開設した。この図書館の大きな特徴は、１階に広がる「いたばしボローニャ絵本館」である（図１）。イタリアのボローニャ市から板橋区へ寄贈された絵本を中心に、世界約100か国、３万冊以上、70言語の絵本を所蔵する。ガラス越しに公園を臨む広々した空間では、子どもも大人も絵本を通して世界の文化に触れることができる。板橋区立中央図書館は2022年度グッドデザイン賞も受賞した。

図１　板橋区立中央図書館１階のいたばしボローニャ絵本館

筆者は、2017年度より表現学科での授業やゼミ活動で扱うコンテンツのひとつに「絵本」を選び、研究を進めてきた。2018年には『魔女の宅急便』で知られる角野栄子氏が国際アンデルセン賞（作家賞）を受賞したことから、この選出を行う国際非営利組織IBBY（国際児童図書評議会）の世界大会と授賞式を視察し、児童文学における文学賞の今日的役割を論考した。[3)] その後も、出版市場における絵本IP（Intellectual Property　以下IPとする）の特異性や、板橋区立美術館が推進してきた国際原画展のスキームに着目し、３カ年（2017～2019年度）にわたるプロジェクトから絵本の多面的論考を試みた。[4)] さらに、板橋区が「絵本のまち板橋」のブランド化をスタートさせた2021年度からは、板橋区立美術館、板橋区立中央図書館と連携し、学生が地域を取材してWeb上に記事を配信する「絵本のまち板橋プロジェクト」を始動した（図２）。

また、2021年４月には国際交流基金（The Japan Foundation）モスクワ日本文化センターが主催する

図２　「絵本のまち板橋」プロジェクトでの地域連携（2021年度～）

新美南吉「てぶくろをかいに」絵本表紙コンクールの日本側の審査会を運営する機会を得た。ロシア以外にもウクライナ、ウズベキスタン、スロベニアなどから集まった593点の応募作品を、審査会場となった淑徳大学東京キャンパスの教室に並べ、児童書の専門家らと各賞を選出した。学生が選出した賞も含め、入選作は翌年２月に新美南吉が同作を執筆した東京都中野区の中野東図書館に展示された（図３）。奇しくも同月中にロシアによるウクライナ軍事侵攻が始まったが、本コンクールにはウクライナからの応募も多く、企画の目的が「平和のための国際交流」であることに鑑み、展覧会を企画した出版社マイティブックによる平和へのメッセージを付す形で、展示は予定通り最終日まで継続された。本企画の取り組みは、あらためて「国境を超える普遍的な物語の力」を再確認した機会だった。

図３　「てぶくろをかいに」絵本表紙審査会（左）と学生が選出した作品（中）、日本での表紙展（右）

3

１.２　日本のコンテンツ産業とコンテンツIP

日本では2004年６月に「コンテンツの創造、保護及び活用に関する法律（コンテンツ促進法）」が公布された。この中で「コンテンツ」とは、「映画、音楽、演劇、文芸、写真、漫画、アニメーション、コンピュータゲームその他の文字、図形、色彩、音声、動作若しくは映像若しくはこれらを組み合わせたもの又はこれらに係る情報を電子計算機を介して提供するためのプログラム（電子計算機に対する指令であって、一の結果を得ることができるように組み合わせたものをいう。）であって、人間の創造的活動により生み出されるもののうち、教養又は娯楽の範囲に属するもの」[5] と定義している。この法律では、知的財産基本法の理念に沿って、コンテンツの創造、保護および活用の促進に関する基本理念が定めら

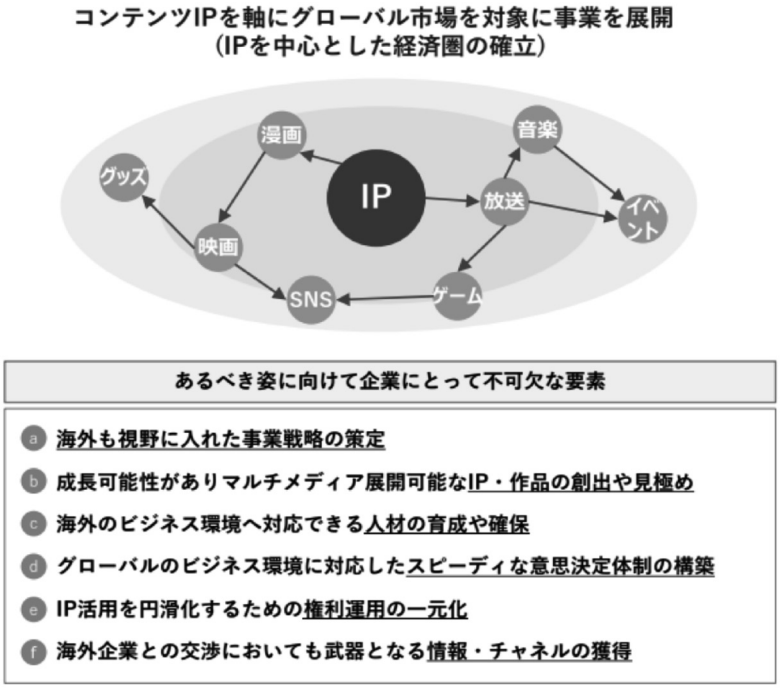

図４　コンテンツIPの強い日本のコンテンツ産業が目指すべき姿と不可欠な要素[6)]

れている。国は、日本で制作されたコンテンツのIPを基軸とするコンテンツ産業の成長性に着目し、2010年には経済産業省にクール・ジャパン室を設置した。現在はコンテンツ産業課が政策窓口となっている。令和３（2021）年度コンテンツ海外展開促進事業において実施した調査報告書によれば、「世界のコンテンツ関連産業は、2020年時点で220兆円程度となっており、今後も市場規模の拡大が予測されている。一方で、日本のコンテンツ市場規模の推移は、2015年以降、12兆円程度と横ばいの状況が続いており、少子高齢化やそれに伴う人口の自然減等の要因により、市場の成長率は鈍化している」と指摘し、「日本のコンテンツ関連産業が引き続き発展していくうえでは、世界のコンテンツ市場の成長を取り込むことが不可欠」としている。[6)] そして、日本のコンテンツ産業が今後目指すべき方向性と、それに必要な要素を図４のように示した。米国や中国などの配信プラットフォームでの流通を中心としたビジネスモデルを後追いするのではなく、世界中で高い人気を有する日本のコンテンツIPの優位性を軸に、コンテンツIPを起点として制作と消費の経済圏を形成し世界中の消費者に対して多元的なビジネス展開を行うべきだと提言している。そのために不可欠な６つの要素（図４の中のａ～ｆ）を挙げ、海外を視野に入れた成長性のあるIPの見極めや人材育成、海外との情報ネットワークやチャネル獲得の重要性に触れている。

4

２．本研究の目的：ローカル＆グルーバルの両面で絵本IPを捉え直す

出版業界の中でもとくに絵本の出版は、他の出版分野に比べて早くから海外ネットワークが構築されてきた。絵本は、読者を惹きつける力強い物語や優れた画家・イラストレーターによる作品であれば、国境を越えて読者獲得ができるコンテンツIPであるためだ。ボローニャ・チルドレンズ・ブックフェアをはじめとする国際ブックフェアは、IP発掘や商談の場として機能し、海外クリエイターの開拓や翻訳本の商談を推進してきた。また、絵本の場合、コンテンツ産業側の商業的側面のみならず、図書館運営や子どもの読書活動推進とも密接に関係しているため、関係省庁、自治体、図書館、教育機関、地域の

表１　ポストコロナの絵本についてローカルとグローバルの両面で捉え直す

ローカル視点	グローバル視点
・絵本のまち板橋 ・板橋区立美術館 　- ボローニャ国際絵本原画展 ・板橋区立中央図書館・いたばしボローニャ絵本館 　- 世界の絵本展 　- いたばし国際絵本翻訳大賞 　-（講座）講演会シリーズOnTheTable 　-（講座）世界の書棚から ・ボローニャ絵本さんぽ（地域店舗が参加）	・児童書の国際ネットワーク ・イラストレーターの登竜門としての国際絵本原画展 ・第38回IBBY世界大会（マレーシア）での各国の発表 ・マレーシア視察 　- クアラルンプール図書館（SDGsセンター含む） 　- 国際交流基金クアラルンプール日本文化センター 　- 紀伊國屋書店クアラルンプール店 　- ブキット・ジャリル蔦屋書店 　- その他書店、コンビニエンスストア店頭ほか
ポストコロナ（2020年～）での社会的背景や共通課題	
・グローバル化 ・SDGs ・戦争	・デジタル化 ・多文化共生 ・社会的分断　など

NPOなど、さまざまなステークホルダーが絡む分野でもある。

そこで本研究では、表１のようにローカルな視点とグローバルな視点の両面から、絵本IPをめぐる動向を探り、論点の整理を試みることとした。ローカル視点では、2021年度から板橋区が着手した「絵本のまち板橋」の展開を中心に、グローバル視点では、2022年９月にマレーシアで開催された第38回IBBY（国際児童図書評議会）世界大会および同国での書店や図書館の視察を中心に情報を汲み上げ、さらにポストコロナの今日的課題に引きつけて、絵本IPをめぐる論点を整理、論考する。

３．ローカルから捉える―「絵本のまち板橋」を軸とした地域活性

３．１　板橋区立美術館「ボローニャ国際絵本原画展」

前述の通り、「絵本のまち板橋」のきっかけは、板橋区立美術館がイタリア・ボローニャ国際絵本原画展（以下、ボローニャ展）を通じてボローニャとの交流を深めてきたことにある。例年３月に開催されるボローニャ・チルドレンズ・ブックフェアの会場で入選作品が発表され、板橋区立美術館での展示は夏頃になる。2021年は７月17日～８月15日、2022年は６月25日～８月７日に開催された。原画展への応募は５点セットなので、ボローニャ展でもいずれの入選作も５点ずつで掲示される。会期中は関連の講演会やワークショップが開催され、地域住民のみならず、絵本ファンが多く集まる。2021年からは、表現学科のゼミ学生がボローニャ展を取材しWeb（note）に記事を発信する活動も始め、当日に来館されていた入選者や美術館の松岡館長へ取材をさせて頂くなど、貴重な機会を得た（図５）。

図５　2021年のボローニャ展の様子。右は取材時に来館していた2021年入選者ホリベクミコ氏[7)]

3．2　板橋区立中央図書館での「絵本のまち板橋」講演会シリーズ

板橋区立中央図書館では、2022年度から「絵本のまち板橋」の講演会シリーズとして毎月２種類の講演会を開催している（表２）。この講演会は板橋区立美術館と板橋区立中央図書館の共催で、さまざまな出版社、さまざまな国の専門家を通じてシリーズで学べるラインナップになっている。

表２　「絵本のまち板橋」の講演会シリーズ

講演会シリーズ名	講　師	内　容	ラインナップ
On the table 私の作ったこの１冊 ― 編集者にきく―	絵本の編集者	色校正など制作プロセスの資料を机の上に並べながら、１冊の絵本が完成するまでの過程や制作秘話を聞く	出版社が毎月変わるのも特色。 偕成社、グランまま社、講談社、河出書房新社、ブロンズ新社、主婦の友社、小学館、福音館書店、ポプラ社ほか
世界の書棚から	在日大使館の職員や各言語の翻訳家など	各国の注目の絵本作家や作品、最新出版事情などを聞く	イタリア、カナダ、ポルトガル、ベルギー、アルゼンチン、イラン、英語圏、ポーランド、フランス、中国ほか

板橋区立中央図書館ではこの他にも、ボローニャ市から寄贈された絵本を紹介する「ボローニャ・ブックフェアinいたばし 世界の絵本展」（８月中下旬）の開催や、1994年から継続している「いたばし国際絵本翻訳大賞」の運営も行っている。翻訳大賞は、英語部門で毎年約600～900件、イタリア語部門で約200件の応募があり、中学生対象の英語部門も設置されている。

3．3　地域の店舗が参加してボローニャ展をともに盛り上げる「ボローニャ絵本さんぽ」

「ボローニャ絵本さんぽ」は、板橋区立美術館のボローニャ展の開催に合わせて、板橋区内のカフェや書店などが協力し、絵本作家の原画を飾ったりミニイベントを開催したりすることで地域を盛り上げる活動である。参加店舗を回遊してもらえるように沿線図にまとめた「ボローニャ絵本さんぽMAP」（図６）が区内各施設や参加店でも配布される。この活動はボローニャ・チルドレンズ・ブックフェア開催中のボローニャ市の街を手本として、板橋区立美術館の松岡館長が中心になり草の根的に広げてきた。ボローニャ市では、ブックフェア期間中は街中のいたるところで同様のイベントが開催され、街全体がブックフェアの色に染まった雰囲気になるという。

6

図６　ボローニャ絵本さんぽ2022MAP[8)]

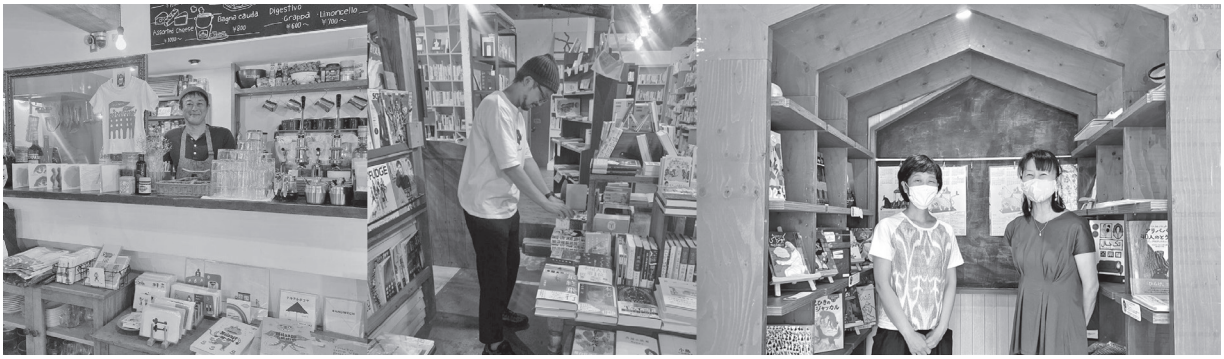

図７　ボローニャ絵本さんぽで学生が取材した店舗オーナー

絵本さんぽに参加している店舗は、淑徳大学東京キャンパスの近くにも点在しており、2021年からゼミ学生が各店を取材し前述のWeb記事にまとめている。近所でありながら学生も足を運んだことのない店舗が大半で、魅力的な店主との出会いから学生は大いに刺激を受けていた（図７）。

このように、板橋区はボローニャ国際絵本原画展を軸に、絵本に関係するさまざまなステークホルダーや地域とのネットワークを構築している。この蓄積が「絵本のまち板橋」というブランド化につながっていることが再確認できる。

４．グルーバルから捉える―①児童書・絵本に関する国際ネットワークIBBY（国際児童図書評議会）

４．１　IBBYの理念とおもな活動

IBBY（International Board on Books for Young People：国際児童図書評議会）は、2022年現在、80の国と地域が加盟している非営利組織で、発足は1953年に遡る。第二次世界大戦で荒廃したヨーロッパで子どもたちのために図書展を開催しようと呼びかけたイェラ・レップマンの着想がもととなり、「子どもの本を通して国際理解を深め、世界に平和を」という理念で誕生した。現在の本部はスイスのバーゼルにあり、加盟国の各支部と連携しながら、国際アンデルセン賞の選出のほか、加盟国が推薦するIBBYオナーリストの紹介、障がい児の読書のためのプロジェクト、CHILDREN IN CRISISプログラム（危機にある子どもへの支援活動）、機関誌「Bookbird」の発行、世界大会の開催など、児童書の出版と普及に関わる人をつなぐ世界的ネットワークとして活動している。

基本方針には、以下のことが挙げられている。[9)]

１．子どもの本をとおして国際理解をすすめること
２．どんな場所にいる子どもたちも、文学的、美術的に質の高い本にめぐりあえるようにすること
３．世界中、ことに発展途上国において、すぐれた子どもの本の出版や普及を奨励すること
４．子どもと子どもの本に関わる人々を支援し、その能力を高める機会を提供すること
５．児童文学関連の学術研究、調査活動をすること
６．子ども権利条約にのっとって、子どもの権利を守り、支援すること

日本支部となるJBBY（一般社団法人 日本国際児童図書評議会）は、1974年に設立され、作家、イラストレーター、出版社、編集者、翻訳者、ジャーナリスト、教師、研究者、図書館司書、書店など、多様なステークホルダーが会員となっている。

4．2　IBBY世界大会マレーシアの視察から

IBBYは隔年で世界大会を開催し、各支部やIBBY全体の活動報告、研究発表、パネルディスカッション、国際アンデルセン賞の授賞式などが行われる。2022年にマレーシアで開催された第38回の大会テーマは、「ストーリーの力（The Power of Stories）」であった。４日間におよぶ世界大会は、マレーシアの首都クアラルンプールとクアラルンプール国際空港の間にあるプトラジャヤで開催された（図８）。受付奥のオープンスペースには各国支部から選出されたIBBYオナーリストの絵本が自由に閲覧できるよう展示されており、参加者は発表の間や休憩時間に利用していた（図９）。

図８　第38回IBBY世界大会の会場（マレーシア　プトラジャヤ）

図９　IBBYオナーリストに選ばれた絵本などが並ぶオープンスペース

第38回IBBY世界大会での研究発表や活動報告における、代表的なテーマと事例を以下に挙げる。

●今日的な教育目標を反映した絵本・児童書の活用

例）SDGsブックリストの教育現場での活用

科学教育における物語の活用

P4C（Philosophy for Children）など「対話」を促す場での絵本活用

●ケアとしての読書療法（Bibliotherapy）に関する研究発表

例）レバノン：2020年８月のベイルート港の爆発事故をテーマとした絵本

自然災害による被災でトラウマを抱えた子どもに対するケア

●各国のおかれている文化的状況に応じた取り組み

例）多民族国家であるマレーシア：民族を超えた共通性やメッセージ性を持つ作品

多様なルーツを持つ子どもが集まるシンガポール：絵本で母語の発話を促す取り組み

民族の多様性が少ないタイ：絵本を通じて多様性への意識構築を促す取り組み（図10）

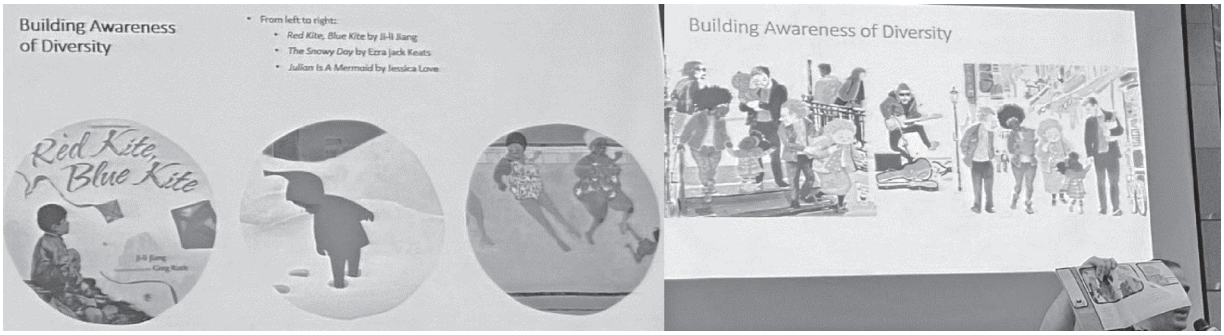

図10　絵本を通じて多様性への意識構築を促す取り組みについての発表

また、IBBY世界大会では国際アンデルセン大賞を受賞したマリー=オード・ミュライユ（作家賞・フランス）、スージー・リー（画家賞・韓国）の授賞式および受賞者プレゼンテーションが行われた。2020年にアストリッド・リンドグレーン記念文学賞を受賞しているペク・ヒナ（韓国）のパネルトークもあり、独創的な世界観を持つ韓国イラストレーターの存在感が目立った。（図11）。

図11　存在感の高まる韓国のイラストレーター（上段：スージー・リー、下段：ペク・ヒナ）

4.3　イラストレーターの国際的な登竜門としての絵本賞

絵本の担い手である画家・イラストレーターが国際的評価を得るうえで、IBBY選出の国際アンデルセン賞や、ボローニャ国際絵本原画展のような場は重要な機会になっている。表1には、国際的に評価の高いおもな絵本賞をまとめた。いずれの賞も、審査員メンバーの多様性を重視している。とくに、ボローニャ国際絵本原画展では5名の審査員を毎年入れ換えており、選出した「入選」作に順位を付けないことも特徴的だ。この審査員を務めた経験のある板橋区立美術館の松岡館長によると、主催するボローニャ・チルドレンズ・ブックフェアが「多様性を重視すること」「対話と橋を架ける場として世界が繋がること」の2つを大切にしていることが背景にあり、コンテストに順位がないのは優劣なく入賞作品を選ぶ審査をしているからだという。なお、2022年の入選者にはウクライナの作家もロシアの作家も選出されていたが、関係者での話し合いの結果、このブックフェアの理念を反映し、ロシアの作家を排除するのではなく、ロシア人の作家個人として入選者を同じように展示することに決定している。

表３　国際的に評価の高いおもな絵本賞（画家・イラストレーター向け）

賞	主催者	創設年	対象	発表時期	補足	直近の受賞者	過去の日本人受賞者
国際アンデルセン賞（Hans Christian Andersen Awards）	国際児童図書評議会（IBBY：International Board on Books for Young People）	1956	全業績が児童文学に永続的な貢献をしたとされる、存命の作家と画家。	偶数年の３月頃	「小さなノーベル賞」とも称される。画家賞は1966年から。表彰式は同年夏のIBBY国際大会で開催。	2022年 マリー=オード・ミュライユ（作家賞・フランス） スージー・リー（画家賞・韓国）	〈画家賞〉 赤羽末吉（1980） 安野光雅（1984） 〈作家賞〉 まど・みちお（1994） 上橋菜穂子（2014） 角野栄子（2018）
ボローニャ国際絵本原画展（Bologna Illustrators Exhibition）	ボローニャ・チルドレンズ・ブックフェア（Bologna Children's Book Fair）	1964	子どもの本のために制作された原画を５枚１組の作品にして応募。 プロアマ問わず応募でき新人作家の登竜門として知られる。 なお、ボローニャ・ラガッツイ賞は、ブックフェア出展者が過去２～３年に出版した児童図書が対象で、本に対して授与される賞。	３月頃	2022年度の原画展の応募は、過去最多の92か国3,873件。 入選者には順位はつけず、近年では中国、韓国、台湾などのアジア諸国の入選者が増加。 1978年以降、日本国内数ヵ所を巡回する原画展が開催され、板橋区立美術館が幹事館を務める。	2022年度の入選者は29か国78名。 うち日本人は以下４名 相澤 史 北村 麻衣子 久保田 寛子 高橋 祐次	第一回の松原直子に始まり、毎年日本人が入選している。 代表的な入選者を以下に挙げる。 三浦 太郎(2001、2003、2004、2005、2006、2007) たかい よしかず(2001、2003、2006、2011) いまい あやの（2003、2004、2005、2006、2009） いしかわ こうじ(2004) よねづ ゆうすけ(2005) 刀根 里衣（2012） 八尾慶次（2013）
ブラチスラバ世界絵本原画展（BIB：Biennale of Illustrations in Bratislava）	スロバキア国際児童芸術館、スロバキア共和国文化省、スロバキアユネスコ国内委員会	1967	１つの国から最大15名の画家をエントリーする。日本のエントリーはJBBYが選考。 出版済みの絵本が対象で原画の美術的価値を評価する。グランプリ（１名）、金のりんご賞（５名）、金牌（５名）を選出。	奇数年の９月	スロバキアの首都ブラチスラバで隔年開催。1996年以降はブラテチスラバでの展示の翌年に日本でも巡回展が開かれるようになった。 社会主義時代には画家が唯一自由に活躍できた場が絵本であったため、絵本芸術の水準が高くなっていたことが背景にある。	〈2021年〉 日本の受賞は 金牌 『たまごのはなし』 しおたにまみこ	グランプリは、 瀬川康男『ふしぎなたけのこ』（1967年） 中辻悦子『よるのようちえん』（1999年） 出久根育『あめふらし』（2003年） 金のりんご賞は、田島征三、安野光雅、谷内こうた　など。近年は、ミロコマチコ『オレときいろ』（2015）、荒井真紀『たんぽぽ』(2017)
アストリッド・リンドグレーン記念文学賞（Astrid Lindgren Memorial Award）	スウェーデン・アーツ・カウンシル（Statens kulturråd Swedish Arts Council）	2002	リンドグレーンにつながる、ヒューマニズムの精神に満ちた、優れた作品を生んだ者、あるいは児童・青少年の読書推進に貢献した者・団体。	３月頃	「長靴下のピッピ」などで世界的に知られるスウェーデンの児童文学作家アストリッド・リンドグレーンの功績を記念し、スウェーデン政府によって創設。	〈2022年〉 エーヴァ・リンドストロム（スウェーデン） 〈2021〉 ジャン=クロード・ムルルヴァ（フランス） 〈2020〉 ペク・ヒナ（韓国）	荒井良二（2005年）
ナミ コンクール	ナミアイランド（韓国）	2012	世界中のすべての絵本作家が対象。グランプリ（１名）、ゴールデンアイランド賞（２名）、グリーンアイランド賞（５名）、パープルアイランド賞（10名）	奇数年の２月	韓国のナミ島で開催される児童書のブックフェアNAMI BOOK FESTIVALで表彰が行われる。ボローニャ国際絵本原画展に次ぐ応募者数を誇る。	〈2021年〉 ビクトリア・セミキナ『Francois Truffaut：The Child Who Loved Cinema』（グランプリ）ほか	加藤寛之『'Mist'ery Train』（2019ゴールデンアイランド賞） 田中清代『くろいの』（2019パープルアイランド賞）

10

５．グルーバルから捉える―②マレーシアでの視察より

５．１　日本および板橋区とマレーシアの関係

第二次世界大戦時は日本によるマレーシアの占領期があったものの、旧マハティール政権が1981年に「ルックイースト政策（高度成長をとげた日本や韓国の集団主義や勤労倫理を手本とする政策）」を掲げ、以降、日系企業の誘致や技術支援を進めてきたことを背景に、日本とマレーシアは良好な関係が続いている。近年はASEAN（東南アジア諸国連合）主要６カ国の１つとして経済成長による中間所得層が増加していることから、日本企業の小売・流通業の進出が盛んだ。2022年１月には、三井不動産が東

南アジア初出店でららぽーと事業最大規模の商業施設「三井ショッピングパークららぽーとブキッ・ビンタン シティ センター（ららぽーとBBCC）」を、2022年７月には、カルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）が同じく東南アジア初出店となる「ブキット・ジャリル 蔦屋書店」をオープンし、日系の各店舗や日本文化を発信するチャネルとしても期待される。

一方、板橋区は1994年から板橋区立熱帯環境植物館とマレーシア・ペナン州立ペナン植物園が友好提携を結んだことをきっかけに、マレーシアとの交流を深めている。2022年５月には、マレーシアのイスマイル・サブリ首相、閣僚一行が板橋区役所を訪問し、クアラルンプール市長との間でSDGsの推進におけるパートナーシップに関する文書に署名している[10)]。そして同月に板橋区は、内閣府 地方創生推進室が進める「SDGs未来都市」に選定された。板橋区がSDGs未来都市に申請した提案タイトルは「絵本がつなぐ『ものづくり』と『文化』のまちの実現～子育てのしやすさが定住を生む教育環境都市～」という、「絵本」を軸としたものである[11)]。

このように、板橋区や日本との関係が深いマレーシアで2022年のIBBY世界大会が開催されたため、滞在時には子どもと児童書の接点である図書館や書店を中心に視察した。

５．２　クアラルンプール図書館と併設のSDGsセンター

クアラルンプール図書館は、マレーシアの首都クアラルンプールの中心部にある公共図書館で、児童向けから大人向けの図書までを揃えている。児童図書のコーナーは大きなガラス面を生かした内装デザインで、靴を脱いで子どもがリラックスして本に親しめる空間になっている。コーナー奥には、段差を利用して参加者が腰かけながら絵本の朗読やワークショップに参加できる空間が広がり、視察の際にはマレーシアのアーティストが自身の描いた絵本原画を傍らに、読み聞かせを行った（図12中）。読み聞かせの途中では、絵本で描かれているパイナップル、バナナの葉、プルメリアの花などの現物を子どもたちの前で見せたり香りを嗅がせたりし、五感に訴える豊かな読み聞かせになっていた。

そしてこの図書館で目を見張ったのが、本館につながる別館に作られたSDGsセンターである（図12右）。円形の建物を利用してSDGsの17の目標が放射状にデザインされており、周囲にはデジタルサイネージを利用したディスプレイが並んでいる。このセンターには、SDGsに関する専任のコーディネーターが勤務し、レクチャーやワークショップのファシリテーションを行っている。円形の空間は、２階のカフェへ続く螺旋階段からも全体を見下ろせ、子どもたちが楽しみながらSDGsに親しめる。このような質の高い公共施設のデザインはIBBY世界大会が開催されたプトラジャヤの公園にも見られた。SDGsカラーの四角いベンチが17の目標として配置され、公園の一画をカラフルに彩っていた（図13）。このベンチに座ると目につく位置には自由に手に取れる本を並べた書棚がある。自然の中でSDGsと本に触れるきっかけが生まれるデザインになっていた。

11

図12　クアラルンプール図書館の外観（左）、読み聞かせの様子（中）、SDGsセンター（右）

図13　公園に溶け込むように設計されたSDGsスペース（プトラジャヤの公園内）

５.３　国際交流基金クアラルンプール日本文化センター

独立行政法人 国際交流基金（The Japan Foundation）は、日本と海外との総合的な国際文化交流を推進する専門機関で、1972年に外務省所管の特殊法人として設立され、2003年から独立行政法人になった。現在の海外拠点は24カ国25拠点で、文化芸術交流、日本語教育支援、日本研究を事業の柱としている。1989年10月に開設されたクアラルンプール日本文化センターには、日本に関する資料や書籍を集めた図書館が併設されている。利用者の約７割はマレー人で、日本のコンテンツに興味のある人や近隣の学校で日本語を学んでいる学生の利用が多いという。子ども向けには、日本の代表的な絵本が並ぶ絵本コーナーのほか、図書館の一画には畳敷きのスペースがあり、その前の本棚には日本の漫画が多く並んでいた。視察の際にも、小中学生世代の子どもが漫画を楽しむ様子があり（図14右）、日本の漫画人気が垣間見れた。

図14　国際交流基金クアラルンプール日本文化センター内の図書館

５.４　紀伊國屋書店クアラルンプール店

12

同店は、クアラルンプール市内でも最大規模と言われる書店で、クアラルンプールのランドマークであるペトロナスツインタワーの足元にあるショッピングセンター「スリアKLCC（Suria Kuala Lumpur City Centre）」の４～５階に位置する（図15）。マレー語を中心に、英語、中国語の出版物も置いているが、英語版は輸入本であるため価格は高い。日本語の本も豊富に揃えている。土曜日の日中に視察したところ多くの人で賑わっていた。大きな公園に接するショッピングセンターのため、家族連れも多く、児童書コーナーはベビーカーで周遊しやすいカーブを取り入れた設計になっていた。この店舗でも目を引いたのは、日本の漫画コーナーである。日本語版から翻訳版まで多くの棚が漫画に割かれており、日本でも人気の漫画キャラクターのグッズも併売され、子どもから大人まで多くの男性客が集まっていた

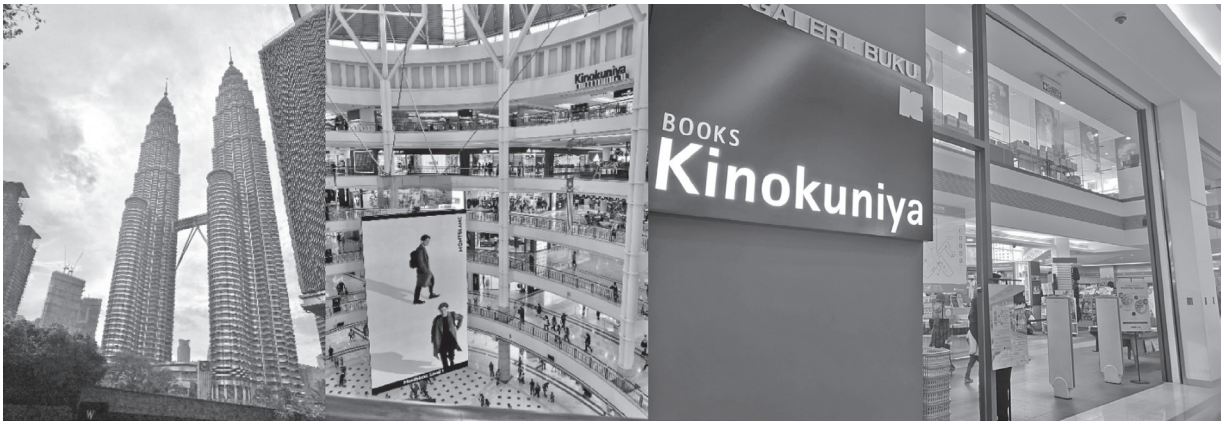

図15　スリアKLCC内の紀伊國屋書店クアラルンプール店

図16　紀伊國屋書店クアラルンプール店の漫画コーナーの様子

（図16左）。また、中国系の若い女性が『文豪ストレイドッグス』を見つけて小躍りしている様子も見られた（図16右）。この漫画では、太宰治、芥川龍之介、中島敦といった文豪がキャラクター化され、日本国内でも若い女性ファンが漫画やアニメをきっかけにして文豪の小説を読むような動きもみられる。同様に海外の若者にも日本文学に関心を持ってもらう入口のIPとなっている。

5.5　書店で目立つ日本アニメ・漫画風の作品

クアラルンプール市内の中規模書店を視察すると、現地で出版されている児童向けの書籍に日本のアニメや漫画風の作品が多く並んでいた（図17）。とくに女児向けの本では、イスラムのヒジャブを被り大きな瞳の中に目の輝きを示す星が入っている表紙が多く見られた。また、日本のアニメや漫画風のタッチでYouTuberやeスポーツをテーマにした本や、COVID-19に関する啓蒙的な本もあった。

13

図17　児童向けの書籍に多用されている日本風アニメ・漫画のタッチ（Borders Book Store店頭）

図18　ブキット・ジャリル蔦屋書店の様子

クアラルンプール南部の人気住宅エリアの複合商業施設パビリオン ブキット・ジャリル内に2022年７月に開業した「ブキット・ジャリル 蔦屋書店」は入店待ちの列が並ぶほどの人気だった。20～40歳代のファミリー層向けに児童書コーナーも充実している一方、子どもにも大人にも日本の漫画やフィギュアのコーナーが人気で多くの客が集まっていた（図18）。

５.６　コンビニエンスストアのレジ横にも並ぶ漫画

書店以外にも、クアラルンプール市内のコンビニエンスストアのレジ脇には漫画用ラックが設置され、KADOKAWAや白泉社などの漫画が陳列されていた（図18）。このラックに並んでいた『はれ食堂』（綾かおり／花とゆめコミックス）は、紀伊國屋書店のレジ前にも並べられていた漫画で、日本では2021年９月に発売された新人漫画家による作品である。中高生向けのラブコメだが、このように新人漫画家であってもテーマや素材次第で、海外で一気に人気を集め得るという示唆がある。

図19　コンビニエンスストアのレジ脇ラック

14

６. 考　察

これまで見てきたことをもとに、絵本IPの今日的課題に照らし、論点を３つ挙げて考察する。

６.１　論点①　時代に応じた絵本の役割の広がり

2020年から広がった新型コロナウィルスのパンデミック、2022年２月のロシアによるウクライナ侵攻など、この２年あまり世界は重大な共通課題に直面した。その間も、世界中で発生している異常気象による被害や、BLM（Black Lives Matter）運動に象徴される根強い差別問題も世界的に報じられており、

図20　多文化理解やSDGs教育を促す絵本を紹介した書籍例[12)、13)]

SDGsに対応した意識変容・行動変容は急務である。このような時勢において、絵本の持つ「物語の力」が果たす役割はますます大きくなっている。IBBY世界大会マレーシアでは、このような世界共通の課題とともに、各国の事情を反映した特徴的な活動も発表されていた。日本でも、多文化理解やSDGsへの理解を促すための絵本のブックリスト化が進んでいる。たとえば、他国理解のためのブックリストとなっている『絵本で世界を学ぼう！』（2020）[12)] は、ロンドン五輪（2012年）や平昌冬季五輪（2018年）の際に作成した出場予定国に関係する絵本の参考リストをもとに、105ヵ国を対象に1ヵ国1冊を選んで紹介文を付け2020年に発行された。『別冊 太陽　日本のこころ301　絵本で学ぶSDGs』（2022）[13)] は、SDGsの17の目標ごとに4～6冊の絵本を紹介している。掲載されている計91冊の絵本のうち49冊が翻訳絵本であることからも、SDGsの学びには多様な海外の絵本が有効であることがわかる。

6.2　論点②　ボーダーレスな才能発掘とクリエイターのキャリアアップ

絵本市場は出版界の中でも比較的堅調とされ、画家・イラストレーターにとっては作品発表の重要な場になっている。雑誌『illustration』を発行する玄光社は、おもに出版社や広告業の制作現場でイラストレーターを探す際に活用されることを想定してムック『illustration FILE』を長らく発行しているが、2013年からは絵本に特化したシリーズを刊行している。5号目となる『絵本のいま 絵本作家2021-2022　illustration FILE』[14)] では、画家・イラストレーター180名、文章家（創作・翻訳）21名が掲載されている。イラストレーターを取り巻く仕事環境では、雑誌の仕事が大幅に減り、Web掲載のイラスト料相場の低下が目立つため、絵本というチャネルが期待されていることも反映している。

一方、絵本原画展というシステムが、新人イラストレーターのデビューやキャリアアップに果たす役割は大きい。オンラインでの商取引も進み、翻訳出版の環境が整ってきたことにより、国境を超えて才能を発掘し、世界市場を見据えて絵本作家がキャリアを積むことが従来以上に行いやすくなっている。2022年の国際アンデルセン賞・画家賞を受賞したスージー・リー氏は、キャリアの早い段階からアメリカ、ヨーロッパ、アジアで作品が出版されている。従来の国際アンデルセン賞は長いキャリアで培った功績者が中高年以降に受賞するケースが多かったが、スージー・リー氏はまだ比較的若いクリエイターである。日本の絵本作家においても、今井彩乃のようにボローニャ国際絵本原画展の入選を機に海外で外国版の絵本が出版されてデビューを果たし、その後に日本語版が逆輸入型で出版されるケースがある。このようなグローバル化によるキャリアアップのスピード化の傾向は今後も強まる可能性がある。

6．3　論点③　漫画・アニメIPの広がりと日本企業の海外進出

今回のマレーシア視察において、日本の漫画・アニメのコンテンツIPが大きな存在感を持っていることは顕著だった。このことは、視察で確認できた店頭での人気だけではなく、実際に人材育成の分野にも波及している。2022年７月には、日本資本のクリエイター養成校である日本デザイナー学院マレーシア校がクアラルンプール市内に開校している。設置学科はマンガ・イラストレーション学科で、世界中のサブカルチャーに影響を与える日本のマンガ・イラスト分野の教育を行うという。[15)]

また、2020年のボローニャ・ブックフェアにおけるボローニャ・ラガッツイ賞では、グラフィックノベル部門が新設されたが、このことについて児童書の編集者ほそえさちよ氏は、「児童書界において漫画（コマ割り）形式の書籍が無視できないほどのシェアを占めるようになってきたから」とその理由に触れ、「近年では、漫画家のページ構成力、さまざまなタッチを備えた画風の多彩さなどで、さらに絵本の魅力を広げて」いると指摘している。さらに、「漫画の文法は世界中で共有されており、ヨシタケシンスケやクリハラタカシなどの漫画と絵本の垣根を感じさせない作品が増えることで、今後も多くの読者を獲得していく」傾向を予見している。[14)] イラストレーション、漫画、アニメの境界線上の作風は今後も増えていき、絵本の領域にも多様な表現が広がっていくことだろう。

そして、漫画・アニメIPのグローバル市場をにらんだ動きとして、コロナ禍以降、日本も海外企業との協業を進める動きが見られる。最近では、TBSが、韓国NAVERグループ企業で電子漫画・プラットフォーム韓国１位の「NAVER WEBTOON」社、漫画制作会社「SHINE Partners」社との３社合弁で新会社「Studio TOON」を設立することを発表し、韓国の総合コンテンツ大手CJ ENMが傘下のドラマ制作会社スタジオドラゴンと、日本のLINEマンガ運営企業であるラインデジタルフロンティアとの３社で出資した合弁会社スタジオドラゴンジャパン（仮称）を設立すると発表した。[15)] アジアにおける児童書や絵本の分野にも、少なからずこれらの影響が及ぶだろう。アジア各国で一気に進んでいるデジタル化の波とともに、人気IPをどのように広げていくか、日本の優良なIPを保有する企業は、さまざまなチャネルとの提携を通じて検討している。

7．今後にむけて

本研究では、絵本をめぐる動向についてローカル（板橋区）とグローバル（国際ネットワークおよびグローバル市場）の両面から捉え、今日的な課題に照らして絵本IPについて論考を行った。絵本のもつ多面性によって、他の表現領域へ応用できる視座や、コンテンツ産業、行政などのさまざまなステークホルダーから俯瞰する視座を得ることができた。これらの多面的な視座は、今後の自身の研究の土台になると感じ、あらためて表現にたずさわる学問分野の広がりを認識できた点も有意義であった。そしてフィールドワーク、教育実践、研究を通して、板橋区がいかに「絵本」という強い資産と、海外ネットワークを有しているかも再確認できた。日本国内に「絵本」を有力な集客コンテンツとしているエリアは他にもあるが、板橋区が出した新ビジョンで示されたように絵本と印刷・製本業のシナジーを作っていくことや、区内に６つの大学を抱えている点は、板橋区ならではの特長と言える。今後も、板橋区にキャンパスを置く人文学部として「絵本のまち板橋」の取り組みを通じ、地域の持つ文化資産を通じた研究・教育活動を継続していきたい。

謝辞

板橋区立美術館 館長の松岡希代子氏、いたばしボローニャ絵本館の笹岡智子氏、ジャーナリスト松井紀美子氏に深く感謝いたします。

引用文献

1）いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン2025（2021年4月9日更新），板橋区HP
https://www.city.itabashi.tokyo.jp/bunka/bunka/vision/1031643.html
（2022年9月13日アクセス）

2）「ボローニャ市と絵本のまち板橋」板橋区ホームページ（区政情報，ボローニャ市とのつながり）
https://www.city.itabashi.tokyo.jp/kusei/1025922/1026085/index.html
（2022年9月13日アクセス）

3）杉原麻美「児童文学における文学賞の今日的役割と可能性―国際児童図書評議会（IBBY）と国際アンデルセン賞の視察から―」『淑徳大学人文学部研究論集 第4号』
淑徳大学人文学部，2019，pp.83-95

4）杉原麻美「絵本をめぐる多面的論考 ―絵本プロジェクトから得られた視座―」『淑徳大学人文学部研究論集 第6号』
淑徳大学人文学部，2021，pp.63-57

5）「コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律」（平成十六年法律第八十一号）e-Gov　https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=416AC1000000081_20210901_503AC0000000036
（2022年9月13日アクセス）

6）「コンテンツIPを中心とした我が国のコンテンツ産業の競争力強化に向けた提言：諸外国のコンテンツIPを中心とした競争力強化に関する調査事業 成果報告書」経済産業省　政策一覧　コンテンツ産業，2022
https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/contents/downloadfiles/report/r3contentskaigaitenkaisokushinjigyou.pdf
（2022年9月13日アクセス）

7）第5回：「2021イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」，note「絵本のまち板橋」プロジェクト
https://note.com/sh_ehon_project/n/nf2f7de40f6d6
（2022年9月13日アクセス）

8）絵本のまち板橋＆ボローニャ絵本さんぽ2022，板橋区立美術館HP
https://www.city.itabashi.tokyo.jp/artmuseum/_res/projects/project_artmuseum/_page_/004/001/555/ehonsanpo__2022.pdf
（2022年9月13日アクセス）

9）「IBBYとは」JBBYのHPより　https://jbby.org/about-ibby-2
（2022年9月13日アクセス）

10）「マレーシア首相及び閣僚らが板橋区役所を訪問しました」板橋区HP（2022年9月13日更新）
https://www.city.itabashi.tokyo.jp/bunka/kouryu/gaikoku/1040002.html
（2022年9月13日アクセス）

11）「令和4年5月20日　板橋区が2022年度SDGs未来都市に選定！」板橋区HP（2022年5月20日）
https://www.city.itabashi.tokyo.jp/kusei/kouhou/houdou/1039102/1039234.html
（2022年9月13日アクセス）

12）吉井 潤，柏原寛一『絵本で世界を学ぼう！』青弓社，2020

13）絵本でSDGs推進協会 編『別冊 太陽　日本のこころ301　絵本で学ぶSDGs』平凡社，2022

14）イラストレーション編集部『絵本のいま　絵本作家2021-22 illustration FILE』玄光社ムック，玄光社，2021

15）「日本デザイナー学院マレーシア校、開校式典を開催」
Malaysia Business CONNECTION x MTOWNomy（2022年6月29日）
https://connection.com.my/malaysia_news/id=7618
（2022年9月13日アクセス）

16) カン・ハンナ『コンテンツ・ボーダーレス：世界の潮流からヒントを得る新しいコンテンツ戦略』クロスメディア・パブリッシング，2022

18